4

黎明期の京都市学校医会

八木聖弥
京都府立医科大学

明治三十一年（一八九八）、勅令によって全国の公立学校に学校医が設置されることになった。明治初年から西洋医学を基盤とする衛生思想が浸透しはじめ、心身ともに健全な国民を養成することになる。これは国家的事業でもあった。そのためにはまず子どもの生活環境を改善し、学校施設を充実させる必要が生じた。

江戸時代には健康と長寿を願って「養生」が説かれていた。養生は儒教精神に基づき生を享けた親への「孝」を第一義とする。内欲を抑え外邪から身を守る方法は、一定の効果をもたらしたが、感染などにはまったく対抗できなかった。

明治になって新たに衛生論が重視されるようになり、養生とは違った方法で病気の予防が可能になる。まさに寺子屋から学校へ変革するのと歩を合わせ、養生から衛生へと移行するのである。学校医はこうしたなかで誕生した。とかく知育偏重になりがちだった学校教育において、学校医は健康の概念を徹底させる役割を担うのである。集団での教育には、新たな指導法の樹立が不可欠であった。

京都市においても、学校医は早くから衛生教育に尽力するが、個別の活動だけではなく、学校医会を結成して学校医の連携を深めるとともに、情報を共有することが試みられた。特に大正～昭和初期には、今日の活動の起点ともいうべき骨格が形成される。当時の学校医会の活動は『京都医事衛生誌』などの雑誌に報告されている。今そのすべてを紹介することはできないが、次のような案件が議論の中心となっていた。

（一）身体検査の実施項目
（二）トラホーム対策
（三）校庭のアスファルト化
（四）教室の掃除
（五）林間・海浜学校の実施
（六）机・腰掛の標準

これらの活動に主体的に参画したのは、遠藤大太郎と豊田順爾であった。

遠藤は安政五年（一八五八）鳥取県に生まれ、小学校教員を経て医学校を卒業した。明治二十一年（一八八八）には京都の下京第二十四尋常小学校で学校衛生に参画した。全国の学校医設置に先立つこと十年。同二十三年（一八九八）には京都医会（医師会の前身）発足に名を連ねている。同三十一年に尚徳校の校医を嘱託され、下京区学校医会の創設メンバーの一人であった。いわば京都市学校医会の草分けである。

上記（一）～（五）の問題は、すべて遠藤が主唱したのであり、大正二年（一九一三）には文部省から学校衛生の功績に対して選奨されている。遠藤は京都市にとどまらず、全国との連携を目指し、学校衛生の普及に尽力した。彼の考えは同七年（一九一八）の「学校衛生十五要」にまとめられ、以後学校医の指標となった。まさに京都の学校衛生は、彼によって基礎が築かれたといってよい。

豊田は明治十九年（一八八六）群馬県に生れた。大正七年から室町校の校医になり、昭和二年（一九二七）には「座高三角法の研究」で学位を取得している。近視や脊柱彎曲は学校での姿勢の悪さにあると考え、適切な机・腰掛が衛生への第一歩とみなした。一方でいわゆる虚弱児童の養護にも活躍している。また学校医は学校と家庭との連絡者であるべきとの論を展開し、同二十八年（一九五三）には『学校医の職務活動』を著している。

両者に共通するのは、単に合理的な衛生論だけではなく、養生論（道徳）をも取り入れた形で活動を行った点にある。これは前時代の残影というよりも、両論あいまって健全な心身が育成されるとの考えによると思われる。また軍国主義とは一線を画した活動であったことも見逃せない。